

Language Use in Six Study Abroad Programs: An Exploratory Analysis of Possible Predictors.

6つの場所での海外研修プログラム:

目標言語の熟達にプラスに影響する要因を探す

Dewey, D. P., Bown, J., Baker, W., Martinsen, R. A., Gold, C., & Eggett, D.
(2014).

Language Learning, 64, 36–71.

1. Abstract

Study Abroad (SA=海外研修,留学) において言葉を上達させる前兆、要因として共通に挙げられているのは、その言語をたくさん使用することである。しかし、海外研修の間の言語使用のどんな側面が要因となって上達に繋がっているのかという点についてはあまり注意が向けられていない。この領域の研究はある1地点(場所)での学習者のケーススタディが主になされている。当研究においてはマドリード、メリダ(メキシコ)、パリ、モスクワ、南京、およびカイロに海外研修に行った118名もの学習者を対象にした研究からの言語使用に関連した変数(=要因)を探し求めた。協力者は滞在期間中、1週間彼らのL2使用を報告。その中で、上達をうかがわせるものとして有意であるとして、SAプログラムや年齢、研修前の言語熟達度、母語話者の友人の数、ジェンダー、そして性格があるとわかった。

次の7項目をL2熟達の要因として挙げられると考え、調べていく。

- 1) 滞在期間
- 2) 熟達を目標に掲げるL2の初めの能力
- 3) コース中に使う言語
- 4) アカデミックな活動内の文脈
- 5) 協力者の滞在する家の種類
- 6) ガイド付き/構造化された文化的交流や経験に基づく学習への準備・対策
(Provisions for guides/structured cultural interaction and experiential learning)
- 7) Guided reflection on cultural experience

2. Method

2.1 Research Question

本研究では、海外研修中のL2使用と獲得したL2スキルの間に関連性を調査する。

RQ : SA (Study Abroad; 海外研修) 中のどの変数が L2 使用の熟達につながるのか？

2.2 Participants

- ・マドリード、メリダ (メキシコ)、パリ、モスクワ、カイロに研修にいったボランティア 118 名 (L2 の上達を目的に含む)

Table 1

2.3 Materials

次の計測手段を使用した。

- ・ the Intercultural Development Inventory (IDI; intercultural sensitivity)

IDI : Mitchell R. Hammer

学習者の文化間の違いに openness であり、受容的かどうかを図るテスト。

- ・ the Oral Proficiency Interview (OPI; oral proficiency)

OPI :

- ・ the NEO Five-Factor Inventory (NEO-FFI; personality)

NEO-FFI : Paul t. Costa, Jr. & Robert R. McCrae

性格の尺度。

Table 3

- ・ Language Log (language use)

どれくらい L2 を滞在期間中に使ったか調べるための尺度。

セルフレポート形式で、毎日、1 週間つける。内容は、

授業中 /

授業中に

授業外

Productive

(writing & speaking 活動を指す)

友人やルームメイトと

Receptive

音楽鑑賞中に/ 読書で

以上 4 項目かつ構造分けもされている。

- ・ the Study Abroad Social Interaction Questionnaire (SASIQ; social networks)

SASIQ :

生徒のソーシャルネットワークを図る尺度。

*ソーシャルネットワーク :

他人とひとつないしは複数のタイプのつながりをなすもの。

親戚関係・友人関係・仕事場での関係など

いくつかの先行研究では、ソーシャルネットワークを価値ある役割をもつものと位置づけている。

・加えて、年齢・ジェンダー・研修に行く前に受けた授業数、や他の要因となりうる変数も定めるために、**demographic questionnaire** を受けた。

2.4 Procedures and Analyses

SA に向かう前：

IDI, OPI, NEO-FFI で協力者を分析。

SA の途中：

Language Log を提出してもらおう。

SA 後：

SASIQ で分析。

SA 中の (プログラムなど) 情報は各 SA についていったリスペクティブ・ディレクターに SA の終わりにメールで報告してもらった。詳細な報告内容は、

- ・クラス内外でどのように L2 が使われていたか
- ・クラス内での言語教授
- ・クラス内外の活動で使われていた言語

など。

※カイロに行っていた一人のデータは除外することにした。(4 つ以上もの基準に逸脱があり、また L2 使用時間が少なかったため)

3.1 分析

Total, クラス内、クラス外、受容 (的 L2 使用)、双方向 (的 L2 使用) の 5 つの尺度で分析がなされた。

3.3 Summary of Results

4. Discussion

☆L2 使用に影響したかどうか

- ・文化間感受性レベルは (level of intercultural sensitivity) L2 使用に影響するものではなかった。
- ・性格はクラス外では影響せず、しかし、性格の要素のうちの 2 つ、Openness (率直さ) と Neuroticism (神経質) はクラス内での言語使用に影響を与えた。
- ・Openness : 言語使用だけでなく、コミュニケーション能力、文化間の自己効果、self-perceived L2 proficiency に効果を与える。
- ・Neuroticism : 不安と緊張がクラス内での L2 の使用を妨害する。
- ・モチベーションは今回測定対象にできなかったが、これも非常に大切である。
- ・SA に行く前の L2 熟達度も SA 中の L2 使用量に影響を与えていた。

→低い熟達度：社会的インタラクションを探してしまう。基礎的なコミュニケーションスキルに磨きをかけようとする。

→高い熟達度：きちんと活動を受けてそれを自分の益とする。そして、映画について、文学について、はたまた別のことについての議論をできるようにまでなる。

- ・ただ、L2 熟達度が、L2 を使用する機会を妨げたりすることはない。

- ・年齢：本研究では、年齢の高い方がたくさん言葉を用いて報告できるという結果が出た。年齢の若い方がプラスに働くという先行研究と食い違いが見られた。しかし、これは、先行研究が子ども VS 大人で比較研究したのに対し、本研究ではある程度年齢のいった人を対象に行った、つまり大人を対象に、その大人の年齢の中での効果を調べたため起こったといえるだろう。年齢が高い方がプラスに要因を与えたというのは、そちらの方がモチベーションが高くなる、といったことが考えられる。

- ・しかし、年齢だけが要因とは断言できなそうである。ただ、年齢の高い人の方が L2 をとても使用したりと、年齢と高い熟達度の間に相関が見られた。

- ・Program : SA 先に関わらず、似たような Program を行ったのも事実だが、その中にやはり違いも見られた。それは、言語使用のあるパターンを教えるか否か、ということである(教える方がプラスに働く)。一方、Program の長さやステイ先のタイプ(ホームステイか、宿舎か、など)、英語でのコースワークは関係なかった。

5.Limitations

- ・Language Log が自己レポート形式であり、客観的な観察ができなかったこと。

- ・Program が L2 使用に非常に効果を与えることはわかったが、Program のどんな部分がより大きな効果を与えるかという点においてはまだ解明できていない。

6.Conclusion

- ・年齢・ジェンダー・ソーシャルネットワークの発達・性格が SA での L2 熟達に貢献、プラスに影響していると分かった。

- ・授業外よりも授業中でジェンダーと性格が大きな要因となっていると分かった。

- ・中でも、大きな要因として挙げられるのはプログラム。ほとんどが同じようなプログラムだったが、各プログラム間の熟達に与える影響の度合いを左右した要因として、L2 使用の変種だろうと考えられる。

その差異：

その 1 → (カイロ&メリダ) 協力者に L2 使用を促すようなもう一歩先の要素があった。

その 2 → (パリ) 授業内でより英語を使用できるようプログラムされていた。そのため、授業外での英語の使用も促進する結果となった。

その 3 → 年齢は興味深い要因である。年齢の高いグループはたくさん (一番) L2 を使用しているのに対し、若いグループは使用が低かった。彼らの成熟度はカイロでの広範囲に笑うアラビア語の使用に影響を与えていた。

○今後の展開—総括

・協力者グループのタイプ分けをすべき。

同じL1で同じところからきている結束性の高いグループと、そうでないグループとで比較。

・学習者間の変数も

年齢や、それまでの遍歴（どれくらい海外にいたことがあるか、自宅外で暮らした歴 etc）なども変数として考慮に入れるべき。

⇒もっと、研究が進めば、SAに行く人々の更なる語学の熟達に繋がるようなものを与えられるだろう。

7. 当論文を読んで—考察

この論文を読んでぞっとした、といおうか少し悲しく感じたのは、年齢や・ジェンダー・性格といった自分ではあまりどうしようもできないことがL2の熟達に影響を与えているということである。ただ、この研究結果より、自分で自分の年齢や性格を自覚して意識的にL2の熟達にプラスの影響、成長を少しでも与えられるようにすればいいと分かったのは収穫であるだろうが。

しかしなにより、この研究で大事なことは、Programが最もL2使用、その熟達に影響を与えているということである。前回読んだ論文にも、授業で教える内容でL2 fluencyに影響を与えるだろうという考察もあった。今回の論文には、ProgramのL2使用にいい影響を与えるものについてまで細かく説明はできなかったが、もしかすると、前回の論文の結論が支持されることもあるかもしれない。しかし、そうなってしまうと、SAの利点が、自国内での学習との間になくなってしまおうという懸念はなからうか。なぜなら、Program以外のL2使用にプラスに働いた要因は、年齢やジェンダー、性格といった自分自身ではあまりどうしようもないことばかりであるからだ。唯一、SAの中でしか築けなさそうなソーシャル・ネットワークも、今となってはSNSの発達によって海外に行かずとも築けてしまうだろう。Programの中のL2使用に与える詳細な要因が、SAでしか不可能なものでない限り、SAにいく際のメリットが本当に不確かなものになってしまう恐れがあると思う。裏を返せば、留学や、留学準備にかかる莫大な費用をかけずとも、L2を上達させることができるという期待感、希望が生まれるともいえるが。今後は、L2使用に影響を与えるProgramの詳細が解明され、また、それに基づき、SAに行かなくても（行った方がきっと人生経験的にもすごく大きな実りになると思うが）SAに行ったと匹敵するような授業であつたりのProgram開発に貢献することを期待する。

授業後補足

性格、ジェンダー、SA前のL2熟達度、ソーシャルネットワークに関しては、そのプラスの効果が見られたのは一部の場合のみだった。

・ジェンダーについて

性格やジェンダーはその人の経験に影響はしない。

例えば、参加者があまり開放的でも、外交的でもなかったとしたら、その人が SA の間に L2 インタラクションで成功できないだろうとはいうことはできない。

・ Program について

Program というのは各国のことをさしていた。つまり、各国の体験プログラムが総じて Program と呼ばれているのだ。明言はないものの、先行研究レビューで次のことが挙げられていた。

言語使用に影響を与えるプログラムの変種(=要素)

1. 滞在期間の長さ
2. SA 前の目標言語熟達度
3. コースでの言語使用
4. アカデミックな活動での言語使用
5. 滞在する家のタイプ
6. 構造化された文化活動への用意や学習の経験
7. 文化経験で誘導された (計画された) 影響

などが挙げられている (Engle and Engle, 2003, 2004)。

つまり、各滞在国内で行われるそのプログラム自体、以上のようなものをすべてひっくるめたものが、当論文で使用されている、“Program”なのである。

・ ソーシャルネットワークについて

各人のソーシャルネットワークのサイズが L2 にプラスに影響してくるのはクラス外でのみ。

・ 性格はクラス内での言語使用時のみ。

参考文献

Dewey, D. P., Bown, J., Baker, W., Martinsen, R. A., Gold, C., & Eggett, D. (2014). Language Use in Six Study Abroad Programs: An Exploratory Analysis of Possible Predictors. *Language Learning*, 64, 36–71.